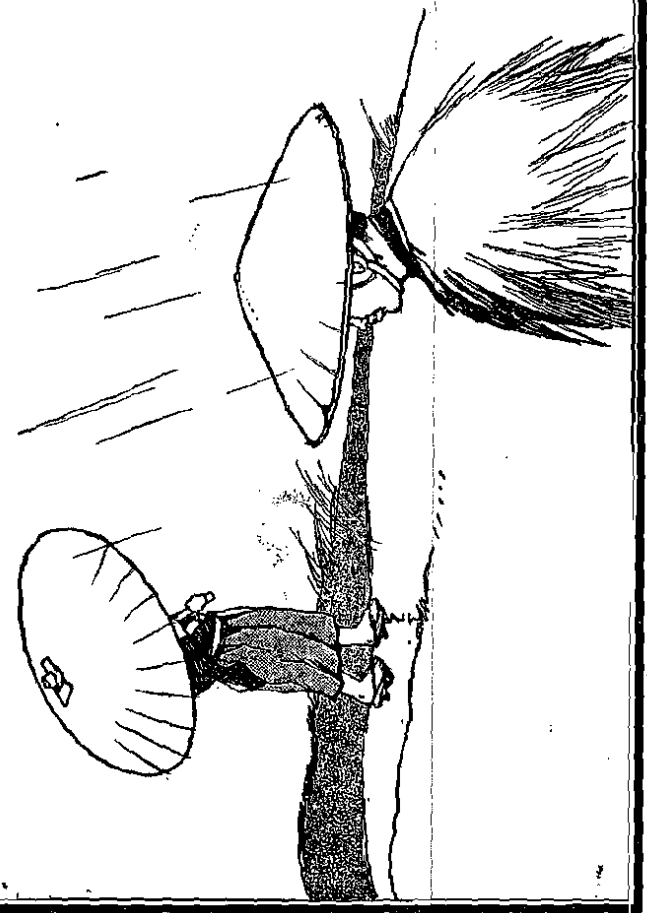


ラ サ カ ノ ミ

カ・サ
カウカサ
ミ



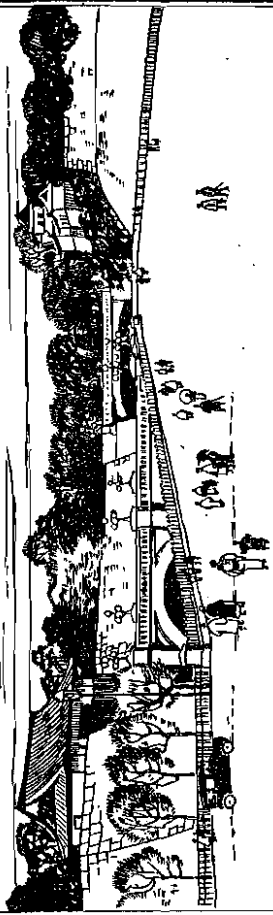
ス メ ア ト

ス ア
メ ト
ハ



一	大日本	一	十四	雨	五十
二	中村君	二	十五	養老	五十二
三	大蛇たいぢ	七	十六	日本三景	五十六
四	松太郎の日記	十二	十七	虹	六十
五	金鵒敷章	十七	十八	峠から町へ	六十三
六	鯉のぼり	二十	十九	用水池	六十八
七	大賣出し	二十二	二十	八幡太郎	七十九
八	ツバメ	二十五	二十一	水見舞	八十二
九	私のゝら	二十七	二十二	郵便函	八十九
十	遠足	三十四	二十三	一足々々	九十五
十一	熊襲征伐	四十一	二十四	ブダウ	九十五
十二	一口話	四十五	二十五	熊のきやき	九十七
十三	蠶	四十六	二十六	東京停車場	百

下民千
萬(方)



一 大日本
大日本、大日本、
神のみすゑの天皇陛下
われら國民七千萬を
わが子のやうに
おぼしめされる。
大日本、大日本、
われら國民七千萬は

「日本一の事をくふうした。」

「何だ。」

「米をつくの^に、上にもうすをさがさにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。」

「上のうすには、どうして米を入れる。」

「それまではまだかんがへなかつた。」

十三 蠶

蠶(蚕)

昨日からうちの蠶が上りはじめました。上

頃

桑

棚

る頃には、蠶のからだがすき通るやうになります。もう桑の葉をたぐないで、頭を上げて繭まゆをかける所をさがします。それをひろつて、まぶしへうつすのですが、少しでもおくれると、かこのうらや棚のすみなどで、繭をかけはじめますから、ちつともゆだんが出来ません。今日のお晝頃はうち中、目がまはるほどいそがしいございました。

動 吉 紙 生



まぶしには、かさくといふ音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。早いのはもう繭を作り上げてゐます。又うすい吉野紙のやうな作りかけの繭の中で、きゆうくつさうにからだをまげて、一生けんめい

所

にはたらいてゐるのもあります。まだ繭をかける場所をさがしてゐるのもあります。今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。さつきおかあさんが、

「民子、いよく今夜一ばんになつたよ。あれで八分通だ。」

と、ねえさんにおつしやいました。おかあさ

んもねえさんも此の五六日は夜もろくろくおやすみにならないのです。

十四 雨

降

此ノ頃ハ雨ガ降リツゞイテ表デ遊ブ日ガアリマセン。カウ毎日降ル雨ハドウナツテシマフノデセウ。

低

カラカサニ降ル雨ガ四方ヘ流レオチルヤウニ水ハ低イ方ヘ低イ方ヘト流レテ行キ

糸糸

マス。庭ヘ降ル雨モ庭ノ高イ所カラ低イ方ヘ流レテ行キマス。ハジメハ糸スチホドノ流デスガソレガダンくアツマツテミヅニオチル頃ニハ流モ早クナリ水ノカサモ多クナリマス。

支流 雨

雨水ノ流レル道ハ地圖ニカイタ川ヲ見ルヤウデス。本流ガアリマス。支流ガアリマス。低クテ廣イ所ニタマルト池ノヤウニナリ、

置

かせて置きたい話がある。」

十九 用水池

貧乏

昔此の村はひどく貧乏で、此の村の名を言ふと「あゝあの貧乏村か」と言はれたものださうだ。此のあたりの青田も、其の頃は太ていあれ地で、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。

地

ところが、今から百二三十年前に、此の村の

考

田

庄屋が、村のことをいろいろと考へたする、どうかして村のあれ地を田地にして、米がとれるやうにしたいものだと思つた。田地にするには、水があるが、引いて来る川がない。どうしても大きな用水池を掘らなければならぬと考へた。

相談

此の事を村の相談にかけた。村の人々は、中々大きな仕事だとは思つたが、さうでもし

夫

賛成

着手

代

なければ、外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、みんな賛成したといふことだ。

着手は來年からといふことになつて、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。物なれた人には相談をかけた。

いよく其の年になつて、庄屋は普請^{ふしん}方をよそからつれて來た。村の人は代り合つて、

運

幅

一日置に普請の手つだひをすることになつた。土を掘る、石を運ぶ、^い樋をうめる、土手をつく、いろいろの工事に、村の人は普請方のさしづをうけてはたらいだ。

土手は長さが三百間、高さが六間半、幅は一番上で三間といふ大きなもくろみであつた。

「そんな大きな池があるだらうか。」

や

首

と言つて、首をひねる者もあつたといふが、
一年ばかりの間は、べつだんくじやうも出
なかつた。氣早な者は自分の持地を田に造
りがへたといふことだ。

翌

翌年の春、大雨がふりつゝいて、せつかくつ
き上げた土手が、半分ほどもくづれてしま
つた。すると、

悪

「もくろみが悪い。」

五

五

「工夫がたりない。」

「こんなむだな仕事をすれば、貧乏村はい
よいよ貧乏になる。」

などと言ふ者が出て来て、手つだひに出る
者は日ましにへつた。

運

庄屋は村の者にいろく言つて聞かせて、
土手をつきなほしたが、運の悪い時には悪
いもので、其の年のつゆに、又土手がくづれ

巻8

8

第第一	山の秋	一	第十三	鶯	四十七
第第二	犬ころ	三	第十四	餅つき	五十五
第第三	武將の幼時	五	第十五	町の辻	五十五
第第四	石合戦	十三	第十六	看板	五十八
第第五	十四歳の時が二度あるか	十四	第十七	塙保己一	六十二
第第六	雀の子	十六	第十八	アメリカだより	
第第七	揚子江	十九	第十九	一 サンフランシスコから	六十四
第第八	呉鳳心	二十三	第二十	二 シカゴから	六十九
第第九	心と心	二十六	第二十一	三 ニューヨークから	七十七
第十	手の働	二十七	第二十二	コロンブスの卵	七十五
第十一	炭の	二十九	第二十三	税	七十七
第十二	朝鮮人參	三十二	第二十四	水のカ	八十一
第十三	大岡さばき	三十五	第二十五	亜の學校	八十三
第十四	子ども事	三十八	第二十六	名古屋市	九十五
第十五	石地藏	四十一	第二十七	廣瀬中佐	九十七
第十六	手紙	四十四	第二十八	胃とからだ	九十九
第十七	小ぞうから主人へ	四十六	第二十九	分業	百三
第十八	主人から小ぞうへ	四十八	第三十	人を招く手紙	百七
			第三十一	乃木大將の幼年時代	百十

國ハ

櫻
當

第一 山の秋

秋は山が美しい。此の間二三度降つた雨に、山の木の葉は目立つて色づいた。黄色なのはならやくぬぎで、赤いのはかへでや櫻やぬるである。林の中へはいると、眞赤になつたつたが、松の木にからまつてをり、日當りのよい所には、つるうめもどきが美しい實をならべてゐる。

四十雀^{から}目白ひよどりもずひわ、秋の山は小鳥

もくろく

第一	今日	一	第十四	麥打	五十六
第二	トック島便り	三	第十五	軍艦生活の朝	六十
第三	弟橘媛	九	第十六	東京から青森まで	六十七
第四	養雞	十一	第十七	いもほり	七十七
第五	動物ノ色ト形	十五	第十八	石安工場	八十
第六	五代の苦心	二十一	第十九	星の話	八十四
第七	ナイヤガラ の 龍	二十九	第二十	白馬岳	九十三
第八	若葉の山道	三十一	第二十一	初秋	九十九
第九	兩將軍の握手	三六	第二十二	北風號	百二
第十	水師營の會見	三十九	第二十三	手紙	百十一
第十一	物ノ價	四十三	第二十四	水兵の母	百十四
第十二	弟から兄へ	四十六	第二十五	選挙ノ日	百十九
第十三	老社長	四十九			

國九

國九

第一 今日

ふけ行く夜のしづけさよ。
あらゆるものはやみといふ
黒きとばりにおほはれて
安き眠に入れるなり。

ひとり目ざむる古時計。
夜をいましむる夜まはりの
拍子木のごとがちくと
さびしく時をききみ行く。



古

會

さんに會つて來たのだと思ふと何となくうれしい氣がしました。

第十四 麥打

一

さんくく、さんくく。

今日は天氣がよいので、朝から麥を打つ音が方々で聞える。

束

正一の家でも、親子三人庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。後には麥の束が山と積んである。それをてんでに一束づつ取つては、兩手で根

散穂莖

本の所をつかんで、打臺にはたくとたくきつけると、莖の先についてゐる穂が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。束を廻して又たくき、穂が残らず落ちてしまふと、束をむしろの向ふにぱいと投げて、又新しい束を取る。後の山がだんだん低くなるにつれて、前の麥藁の山が見るく高くなる。

「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」

あみ笠をかぶつた父がふり向くと、母もすげ笠をそちらへ向けて、

「ほんたうにさうですね。おかげで今日中には大
がいかたつきます。」

と言ひながら正一を見てにつこりした。

仕事は水入らずの三人の手ですんくはかどつ
て行く。何所からかにきやかな歌が聞えて来る。

二

庭に敷きつめたむしろの上に、黄色い麥の穂が一
面に廣げられてまぶしいやうな夏の日にかゝや
いてゐる。正一のうちの人たちに手つだひもまし
つて、七八人の男や女が向ひ合つて、片足をふみ出



し、掛聲を合はせながらばた
んばたんと穀竿で麥を打つ
てゐる。のきが飛ぶ穂がはね
る。ふり上げた棒の先が強い
日光にきらりと光る。
赤いたすきを掛けた女たち
がよい聲で歌をうたふと、
うきんな五平ちいさんが時
時へんな掛聲をして皆を笑
はせる。分家の金次叔父さん

直橋
逃
花
續
汗

は、軍隊歸のたくましい腕ですとんくと打下す。男も女もひたひの汗をほこりだらけの腕でふきながら、にぎやかに打續ける。日はかんくと照つてゐる。庭のすみにはほうせん花が真赤に咲いてゐる。雞が麥のこぼれを食ひに来ては追はれて逃げて行く。

第十五 軍艦生活の朝

東の空が明るくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿がたんくにあらはれて来る。艦橋には當直將校の姿が見え、其のそばに

國九

銃

起床
傳令

は、望遠鏡はうてんきやうを持つた信號兵が遠くを見張つてゐる。舷門へんもんには銃を手にした番兵が近くを警戒してゐる。千數百人の乗員は、今もなほ安らかに眠を續けてゐる。艦内は深山のやうな静かさである。人の顔がやつと見分けられるやうになつた頃、時鐘とき番兵がことくと艦橋の下へ来て、總員起し五分前と當直將校に報告する。軍艦の起床時間は、夏は五時、冬は六時である。間もなく甲板士官や傳令員が起きて来る。副長ふくちやうもはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空をながめる。

浴

に津輕半島が横たはり、近くには形のよい島々などもあつて、大それた景色のよい所であつた。叔父さんのお話によると、浅蟲は名高い温泉場で、海水浴も出来るさうだ。

午後二時二十分、汽車は青森に着いた。北海道に渡る人は、停車場に續いた乗船所から汽船に乗るのである。私は叔父さんに連れられて宿に着いた。叔父さんが

「東京から此所までは四百五十六哩もあるのだが、かうたやすく來てみると、そんなに遠い所に

國 九

來たやうな氣がしないね。」

とおつしやつた。

第十七 いもほり

五時間目の授業がすむと、先生はにこくして、

「今日はこれからいもほりをしませう。皆いつものやうに、此所で支度をして、學校園へお集りなさい。」

とおつしやつた。これこそ僕たちが、一週間も前から毎日タタ待つてゐた命令だつたので、皆一せいに小をとりして喜んだ。さうして大急ぎで學校道

具をかばんにしまひ、めいゝ身輕になつて、校舎の後の菜園に集つた。枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいの畑を、午後の日がかんくと照らしてゐる。

當番が農具小屋から、鍬・シヤベルなどいろいろの道具を出して來た。先生も大きな箱を持つて來て、ほつたいものは此の中へ入れるやうにとおつしやつた。皆は一せいにほりにかかる。僕はわり合にしつかりしてゐる一本の莖を握つてぐつと引張つた。やはらかない黒い土がむくく盛上つたと思ふ

と、四方へくづれる。中からみづくしい白茶色の玉が、じゆずつなぎになつてころろと出て來た。大人の握りこぶし程の大きなのもあれば、雀の卵ぐらゐなかはいらしいのものもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうによく實がいつてゐる。となりては、莖がくさつて引きぬけないのを、星野君が根氣よくほつて、ほつたいものを一つ一つていねいにならべて行く。

あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

往

ふと氣がつくと校長先生と山田先生が箱のそばへ来て面白さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。

第十八 石安工場

一

石安工場と筆太に、
小屋根に上げし看板が、
往來の人の目につきて、
安ぢいさんを知る知らず、
「あゝあの角の石屋か」と

國九

國九

刻
文字

常

飾

誰もうなづく工場あり。

二

石碑^いを刻む文字をほる、
槌^き音のみ音がしましき
廣き工場の片すみに、
安ぢいさんはせくくまり、
常に何をか刻みゐる、
めがねを掛けてはつび着て。

三

店に飾れる石燈籠^{ろう}

大正十年十一月三十日印
 大正十年十二月五日發
 大正十年十二月六日翻刻
 大正十年十二月三十日翻刻發行

小學國語讀本卷九

臨時定價金拾五錢

著作權所有

著作兼
 發行

文 部 省

大正十年十二月五日
 文部省檢査日
 文部省檢査済

翻刻發行
 兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地15
 日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地
 日本書籍株式會社工場

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十二番地
 株式會社 國定教科書共同販賣所

目 次

第一	明治神宮参拜	一	第十五	輸出入	八十五
第二	アレクサンドル大主と醫師ブルグ	七	第十六	登校の道	八十九
第三	道ぶしん	十一	第十七	言ひにくい言葉	九十二
第四	馬市見物	十六	第十八	文天祥	九十六
第五	燈臺守の娘	二十四	第十九	温室の中	百
第六	霧	二十九	第二十	手紙	百六
第七	パナマ運河	三十	第二十一	日光山	百十
第八	開墾	三十七	第二十二	捕鯨船	百十二
第九	陶工柿右衛門	四十四	第二十三	太宰府まうで	百十六
第十	銀行	五十	第二十四	たしかな保証	百二十一
第十一	傳書鳩	五十三	第二十五	平和なる村	百二十四
第十二	鉢の木	五十九	第二十六	進水式	百二十七
第十三	京城の友から	七十二	第二十七	兒島高橋	百三十
第十四	炭坑	七十九			

國十

國十

第一 明治神宮参拜

321/174

十月十二日我等五年生一同は、河井先生にみちびかれて、東京代々木の明治神宮に参拜せり。
 青山の神宮前停留場にて電車を下り、廣き参道を行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。橋を渡り、大鳥居をくぐりて南参道に入る。兩がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出づ。水屋の水に手を清め、口をすすぎて南神門を入れば、拜殿、廻廊など總べて白木

留
達

畫

億
費

應

が出来る。

パナマ地峽に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしばく計畫したところで、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見るに至らなかつた。最後にアメリカ合衆國は國家事業として此の工事に着手し、十年の歲月と八億圓の費用とを費して、我が大正三年遂に之を造り上げたのである。

米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。衛生の設備

文

をよくして危険な病氣を根絶し、幾萬の從業者の健康をはかつた事や、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。

昔、太平大西兩洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

第八 開墾

村はづれにある、うちの糶^カ木山を開墾^カし始めてから、もう一月餘りになる。父は毎日、兄や木^キびきの方藏さんと、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。今日は私もついて行つて見た。

かり取つた雑木、切倒した大木、掘起した木の根や石ころ、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。私は思はず、

「お、すうかり變つた。」

と聲をあげる兄は

「うん、それが四十日間の汗のたまものね。」

といつて、かついで來たつるはしを下へ置いた。
地面は霜で眞白である。あたりは如何にも靜かで、
たまに散る落葉の音が、かさりくと聞える。兄は
そこらに散らばつてゐる木の根や、小枝などを拾
ひ集めて來て、たき火を始めた。父は腰から鎌をぬ
きながら、

「あゝ今朝はながく寒い。指の先がしびれるやうだ。」

といつて、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、鎌
をとぎにかゝつた。力藏さんも、

「しかし天氣が續いてよいあんばいだ。」
と誰に言ふともなく言つて昨日からひきかけて
ゐるけやきの大木を大のこぎりでひき始めた。父
は

「力藏さんまあ一服やつてから始めなさい。」
といったが力藏さんは見向きもせず、元氣な聲
で、

「朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思
つてね。」

と答へて、止めようとしないうすこしくといふ

何處

のこぎりの音があたりの静かさを破る。
向ふの山の頂に日の光が赤々とさして來た。何處
からかぼがらかなひよどりの聲が聞える。やがて
父は鎌を手にして雜木のやぶへはいつて行つた。
兄は私に

「壯吉、お前はおとうさんのかつた雜木を、かうい
ふ風に束ねて運んでくれ。」

といひながら生木の枝で雜木を束ねて見せた。さ
うして兄は腰の手ぬぐひを取つて鉢まきに、父
のかり取つたあとを元氣よくつるはして掘返し

始めた。私は
教へられた
通り、雑木を
束ねては運
び、運んでは
又束ねて、精
一ばいに働いた。



しばらくの間めいくがこんな風に働いてゐる
と、谷向ふのくさむらの中からけたましい羽ば
たきの音を立てて、山鳥が一羽飛立つた。同時に獵れい

銃の音が續けざまに二發聞えた。日は大分高くな
つてさわやかに、やき高く青空をひわの
一群が身軽さうに飛んで行く。

父は

「かうしてみんな手をそろべて働けば、來年の秋
はもう眞白な蕎麥そばの花で、此の地面が埋まつて
しまふのだ。」

と楽しさうに言つた。

かる切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働くので、
仕事は豫想以上にはかどり、九時頃にはもう數坪

縁

の地面が新しく開かれた。力藏さんのひいてゐた
けやきの大木も見事に根本から切倒された。

第九 陶工柿右衛門

窯場から出て来た喜三右衛門は、縁先に腰を下し
てつかれた體を休めた。日はもう西にかたむいて
ゐる。ふと見上げると、庭の柿の木には、ずいなり
なつた實が夕日を浴びて、珊瑚珠のやうにかざ
いてゐる。喜三右衛門は、餘りの美しさにうつと
と見とれてゐたが、やがて

「あゝ、きれいだ。あの色をどうかして出したいも

目

のた
とつふやきな
がら、又窯場の
方へとつて返
した。日頃から
自然の色にあ
こがれてゐた彼は、目のさめるやうな柿の色の美
しさに打たれて、もう立つても居ても居られなく
なつたのである。



喜三右衛門は、其の日から赤色の焼付に熱中した。

替則

以下十何度といふきびしき學校へ行く途中などは寒いといふよりもいたいやうに感じます。面白いのは三日四日續いて寒ければ其の次には又其のくらゐの間暖さが續くといふやうに寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

お知らせしたい事はまだいろいろありますが大分長くなりましたから今日は

十

十

此のくらゐにして置きます。どうか御両親様によろしく。おついでに野田君や山口君にもよろしく。

十二月十八日

原 安雄

水野竹次郎君

第十四 炭坑

図降
よしの炭

此の間九州三池の或炭坑を見物しました。事務所で坑内服に着かへ安全燈を持って案内の事務員と一所に昇降器に乗りしました。合圖のかねが鳴るとすぐ動き出す。地下水のしづくが四方か

勢

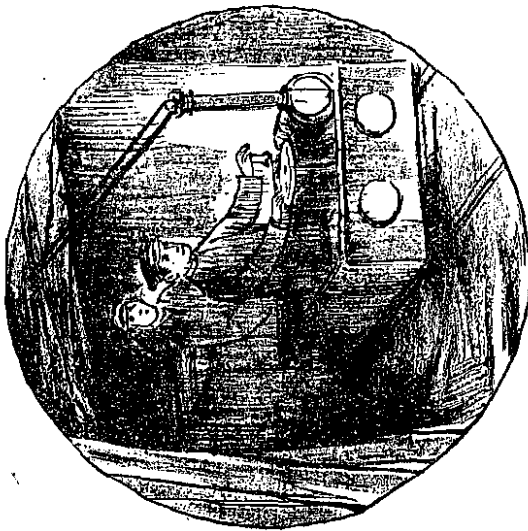
往

ら雨のやうに落ちて来る。昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。安全燈の取手を握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、何時の間にか地下九百尺の坑底に着きました。昇降器を下りて、あたりを見まはすと、周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。此處から方々へ坑道が通じてゐて、廣い坑道には電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

坑道を少し行つて、ポンプ室の前に出ました。室の

十

十



中には大きなポンプが幾つもあり、すさまじい勢で活動してゐます。これは炭坑内の地下水を坑外へ汲出す爲で、こんな大きなポンプを備へ付けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

ポンプ室を出てから小道へはいりました。此處は電燈も無いので、眞暗です。安全燈をたよりに歩いて行くと、不意に足もとからねずみが一匹飛出し

ました。はつと思つて立止ると又一匹事務員は平
氣で、

坑内にはねずみがたくさん居て困ります。
と言つて笑ひました。

其のうちに馬屋の前に出ました。二三十匹の馬が
まぐさ^エを食つてゐます。坑内に馬が居るのは不思
議だと思つて聞いてみるとこれは石炭を運ぶた
めに飼はれてゐるのださうです。

馬屋の前を通つてだんく奥深く進むといよい
よ石炭を掘つてゐる處へ來ました。つるはしの音

國十

國十

思

まじふ
をきこふ

がこつとりく聞える。暗
やみの中にかすかに安全
燈が光つてゐる。近づいて
見ると坑夫が汗だらけに
なつて元氣よく石炭を掘
つてゐます。つるはしの先
がきらりと光る。石炭がが
さりと崩れる。又つるはし
をふり上げる。石炭の壁は
安全燈の光に照らされて



崩

採

黒光りに光つてゐます。採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをざるで運んで炭車に入れる。炭車が一ぱいになると馬方がそれを馬に引かせて、電気機関車の通ふ道まで運んで行きます。

歸途事務員は次のやうな事を話してくれました。

「今から四百年許前の事ださうです。或日、此の附近の山へ薪をとりに來た百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。驚いて調べてみると、あたりは同じ

燃 姓

國 十

國 十

真黒な岩ばかりでした。それから『燃える石』といふひやうはんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。これがつまり此の炭坑の始ださうです。」

坑外に出ると急に夜が明けたやうで、日光の有難さを感じると共に、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、たふといものに思ひました。事務所の湯にはいつて服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

第十五 輸出入

更

羊

我々が今日生活して行くには、我が國で出来る品物ばかりでは用が足らない。又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。

米は我が國でずるぶん多くとれるが、全く外國米の足しまへを受けぬわけには行かない。それで、印度支那半島あたりから年々輸入してゐる。又毛織物の原料になる羊毛は、我が國ではほとんど産しないから、オーストラリアや南アフリカなどから

國十

國十

重

輸入する。機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、物によつてはやはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。それで、機械類もまだかなり多く輸入されてゐる。

我が國は種々の品物を輸入してゐるばかりでなく、國內で出来た物を外國へ輸出することもなかなか多い。輸出品の主な物は、生絲、綿織物、綿絲、羽二重、絹、茶葉など、輸出先はアメリカ合衆國、支那、印度、日本などである。

又外國から原料を輸入し、それに加工して更に外

印 額 豚

國へ輸出する事も少くない。綿花は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造る。これらの製品は我々の使ひ料にもなるが、又支那印度其の他の東洋諸國へ輸出される。支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、又支那へ輸出されるなども同じ例である。最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。

登

第十六 登校の道

冬の朝日のさす軒下に、
俵あむ手のいそがしげなる
父と母とに暇を告げて
勇みで出づる我が家の門。

こずを明るき林を行けば、
やぶかうじの實木の根に赤く、
霜柱たつやぶかげの路、
ふめばさくく銀みだるや



銀

の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞
え上げたるなり

終

國十

大正十一年六月廿六日印
大正十一年六月三十日發行
大正十一年七月一日翻刻印刷
大正十一年七月十日翻刻發行

小學國語讀本卷十

大正十一年定價金貳拾錢

著作權所有

發行者兼

文 部 省

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地¹²

日本書籍株式會社

代表者 大 倉 保 五 郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

日本書籍株式會社工場

東京市日本橋區新右衛門町十二番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

發 賣 所

大正十一年七月三日

文部省檢査済

受入
先
松本
桐原
義司
窪文田
留學學校

目 録

第一課	太陽	一
第二課	孔子	四
第三課	上海	八
第四課	遠足	十一
第五課	のぶ子さんの家	十四
第六課	裁判	十八
第七課	賤嶽の七本槍	二十三
第八課	瀬戸内海	三十一
第九課	植林	三十五
第十課	手紙	四十一
第十一課	畫師の苦心	四十四
第十二課	ゴム	四十九
第十三課	ふか	五十四
第十四課	北海道	五十九

第十五課	人と火	六十五
第十六課	無言の行	六十八
第十七課	松坂の一夜	七十
第十八課	貨幣	七十七
第十九課	我は海の子	七十九
第二十課	遠泳	八十三
第二十一課	暦の話	八十七
第二十二課	リンカーンの苦學	九十四
第二十三課	南米より父の通信	百一
第二十四課	孔明	百十
第二十五課	自治の精神	百十三
第二十六課	ワリントンと少年	百十七
第二十七課	ガラス工場	百二十一
第二十八課	鐵眼の一切經	百二十五

圖十一

圖十一

小學國語讀本卷十一

第一課 太陽

地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論あらゆる生物として生存することは出来ない。これほど我々に重大な關係のある太陽とは一體どんなものであらう。一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは液體に近い氣體であらうといふ。さうして其のさしわたしは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、其の容積は地球の百

陽存

重

積即

鏡 ②

没

古

②

興

氈を敷けるが如く白壁の民家其の間に點在す。
 海の静なることは鏡の如く朝日夕日を負ひて島が
 くれ行く白帆の影も^{いづか}なり。月影のさなみにく
 だけ、漁火の波間に^{しづ}出沒する夜景もまた一段の趣あり。
 瀬戸内海の沿岸には大阪神戸尾道宇品高松多度津高
 濱等良港多く汽船絶えず通航して遠く近く黒煙の青
 空にたなびくを見る。
 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず嚴島は古
 より日本三景の一に數へられて殊に名高く屋島壇浦
 は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。我

が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して
 世界における海上の一大公園なりといへり。

第九課 植林

（一）木十合園

障

一昨年

障子をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。これでは明
 日の山廻りはだめだ。と思ひながら机によりかゝつて
 向ふの方をながめるとうねくと續く岡が雨に煙つ
 てぼんやりと遠く見える。あそこは一昨年植付をした
 地藏山だ。と思ふと山の背を通つてゐる小路の中には
 さんで四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐ
 るのが目に見えるやうな氣がする。

苗木 伐

「あその植付をした時はまだ寒がつた」と思ひ出しながらかつきおとうさんのいひつけて明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、朱線で圍んであるのが今年伐採する處、それから次々といろいろの印がついてゐる。

「地藏山の内、二町三段五畝、峯通り檜苗、其の他總べて杉苗、一坪一本の割。」

とおとうさんの手で記してある。一昨年植付けた時の覺書だ。あの時、

「こんなに間をおいてよいのですか。」

と僕が聞いたらおとうさんが

「早く間伐して細材を取る目的のところでは一坪に二本も三本も植ゑるが、此の邊では太材を取る方が利益だからかう間をおいて植ゑるのだ。今に御らん、此のくらゐ離して植ゑても十五六年目には間伐をしなければならないやうになるから。」

といつて笑つてをられた。

植付けた苗木の枯れた處へ補植をするのは翌年一回だけだといふから、今年はもうしなくともよいのであ

斜

らう。下列^カはいつも土用中にするので、するぶん苦しいが、それでも木が競争するやうにしんを立てて、すくすくと延びてゐるのを見ると、非常にうれしい。木でも見下されるのがいやなのが、斜面などに植えた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、さすゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

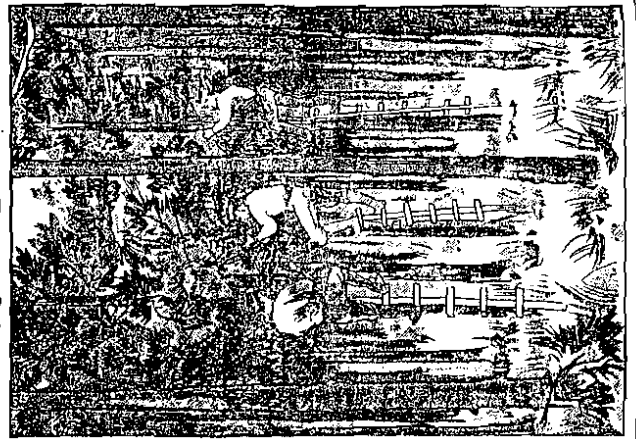
伐

毎年春の初が冬の半ばにする枝打は面白いものだ。なたや鎌などでつる草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よさうに見える。いつかもしさん

髪

が、
「杉の散髪だ。」

といつてみんなを笑はせたことがある。おとうさんのお話によると、枝を打て



ば、山火事の危険を防ぎ、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。それから始めて聞いて面白くと思つたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處

節

が節になるのだといふ。

僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は何時になつたら
伐るのだらう。使ひみちによつて三十年目から五六十
年目くらゐの間に伐るのださうだから一番早く伐る
としても其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつ
てゐるわけだ。今年伐るはずのはおとうさんの子供の
時植ゑたのだといふがもう幹のまはりの三尺餘りも
あるものが大分見える。おとうさんはよく植林は貯金
のやうなもので植ゑてさへおけば年々太つて利息が
附いて行く。とおつしやるがほんたうにさうだ。

ぼんやりいらくの事を考へてゐるうちにいつか夕
方の色が四方にだるよつて向ふの山も薄墨色に暮れ
て行く。あ、西の空がほんのり明るい。明日は晴かも知れ
ない。

第十課 手紙

音 拜啓。久しく御無音に打過ぎ失禮仕候。さて昨
日御地より歸村せられたる河井氏の御話に
よれば貴兄には去月以來御病氣にてしかも
一時は大分御重態なりし由、誠に意外の事に
驚入候。しかし此の頃は餘程御快方に向はれ

倉庫

を思ひ立ちしより十七年即ち天和元年に至りて一切
 經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。
 これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして一切經の廣
 く我が國に行はるゝは實に此の時よりの事なりとす。
 此の版本は今も萬福寺に保存せられ三棟百五十坪の
 倉庫に滿ちたり。

福田行誠きんちかかつて鐵眼の事業を感歎していはく「鐵眼は
 一生に三度一切經を刊行せり」と。

小學常國語讀本卷十一終

廣濟閣智識本資料

大正十二年十二月廿二日印
 大正十二年十二月廿五日發行
 大正十二年十二月廿五日翻刻印
 大正十三年一月二十日翻刻發行

小學常國語讀本卷十一

大正十四年度
時定價金拾六錢

著作權所有

著者兼
發行者

文 部 省

大正十一年十二月廿六日
 文部省檢査
 濟查檢省部文

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇番地
 日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇番地
 日本書籍株式會社工場

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
 株式會社國定教科書共同販賣所

目 録

第一課	明治天皇御製	一	第十五課	まぐろ網	七六
第二課	出雲太社	四	第十六課	鳴門	八十
第三課	テールスターウ	九	第十七課	間宮林藏	八二
第四課	新聞	十四	第十八課	法律	八六
第五課	蜜柑山	十九	第十九課	釋迦	九十
第六課	商業	二三	第二十課	奈良	九四
第七課	鎌倉	二四	第二十一課	青の洞門	百三
第八課	ヨーロッパの旅	二八	第二十二課	トマス・エジソン	百五
第九課	月光の曲	三七	第二十三課	電氣の世の中	百五
第十課	我が國の木材	四十五	第二十四課	舊師に呈す	百九
第十一課	十和田湖	四十九	第二十五課	港入	百二
第十二課	小さなねぢ	五二	第二十六課	勝安芳と西郷隆盛	百四
第十三課	國旗	六十	第二十七課	我が國民性の長所短所	百二
第十四課	リヤ王物語	六五			

國十二

國十二

小學常國語讀本卷十二

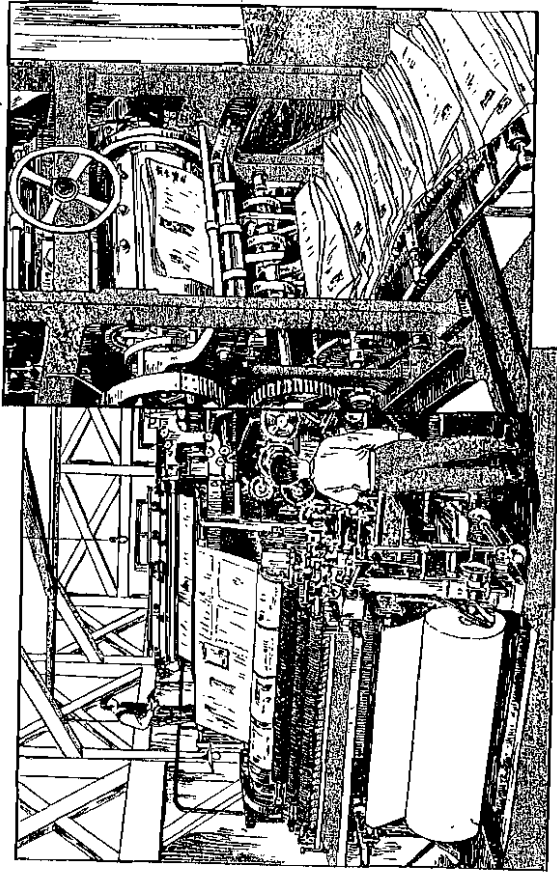
第一課 明治天皇御製

古のふみ見るたびに思ふかな、
 おのが治むる國はいかにと。
 淺緑すみわたりたる大空の
 ひろきをおのが心ともがな。

大空にそびえて見ゆるたかねにも、

能

きは輪轉機の能力なり。巻取紙とて幅三尺六寸、長さ一萬六千尺餘りのものを之に取りつくれば、機械は電力によりて働き、印刷も切斷も人手を要せず、一臺よく一分間に四百五十枚を印刷すといふ。かくて刷上りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。但し大新聞にありて



但

圖十二

隔

は、比較的早く印刷したるものをば地方版として遠隔の地方へ送り、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。されば同一日附の同じ新聞にても、發行地にて受取るものと他地方にて受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

第五課 蜜柑山

沖を走るは丸屋の船が、

丸にやの字の帆が見える。

調子のよい蜜柑^{みかん}取歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、何處からともなくのどかに聞えて来る。今登つ

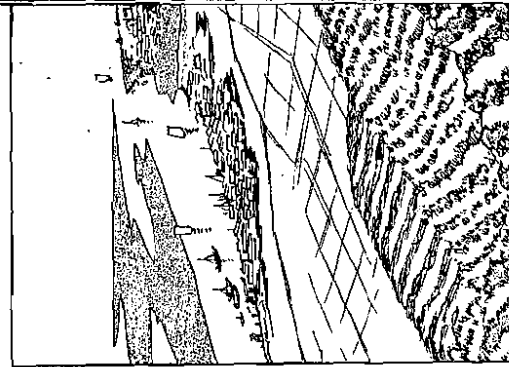
黄金



て來た方を振返つて見ると、幾段にも幾段にもきづき上げられた山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。黒い程こい緑の葉の間から、其の一つくが日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

四十二

採



又少し登ると、どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。ふと見ると、ついそばの木の下では、かごを首に掛け、た二三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。さつきの歌の主であらう。あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんくと聞える。ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

日和

敏

己堅

際

鳥

第六課 商業

商業は之に従事する商人だけを利するためのものではない。商人たる者はよく共同生活の眞意義を辨へ、品質のよい品物になるべく安價になるべく敏速に供給して、廣く公衆の爲を計らなければならぬ。これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。

買ふ人の無智に乗じて安い品を高く賣付け、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、人として爲すべからざる事である。

國十二

國十二

永

影

振

個

又單に損益の點から見ても、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、つまりは小利をむさぼつて大損を招く結果になる。

外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、忽ち國全體の商品の信用に係して、貿易の不振を招き國運の發展をもさまたげることになる。外國貿易業者はかへすぐ深く此の點に注意しなければならぬ。

昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐ

忍耐

賤

程

格解

誤

た。それ故大多數の商人は、自己の利益を除いては、殆ど何物をも眼中に置かず、忍耐も努力も要するに皆自己の爲であつた。彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。これはひつきやう文明の程度が低いために、共同生活の意義が明らかでなく、随つて商業の本質が理解されず、商人の人格が重んぜられなかつたからである。文明の進んだ今日尚此のやうな考を持つのは、大きな誤といはねばならぬ。

第七課 鎌倉

七里が濱のいそ傳ひ、

劔

極

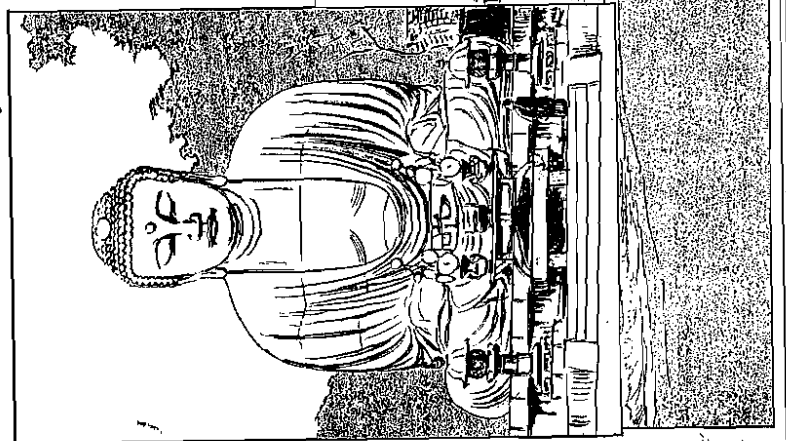
稲村が崎、名將の
劔投ぜし古戰場。

極樂寺坂越え行けば、
長谷觀音の堂近く、

露坐の大佛
おはします。

由比の濱邊を
右に見て、

濱が里七



圖十二

大正十三年六月廿二日印
大正十三年六月廿六日發行
大正十三年六月廿七日翻刻
大正十三年七月十九日翻刻發行

小學國語讀本卷十三

大正十三年
臨時定價金拾七錢

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

日三月七年二十正大
濟查檢省部文

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百。八番地 13

日本書籍株式會社

代表者

大 倉 保 五 郎

印刷所

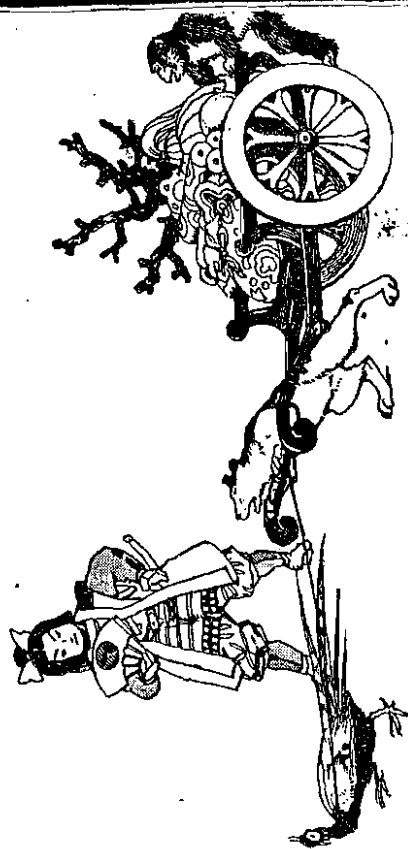
東京市小石川區久堅町百。八番地

日本書籍株式會社工場

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所



クルマ ニ ツンダ タ
カラモ、 イヌガ ヒ
キダス エンヤラヤ。
サルガ アト オス
エンヤラヤ。 キシガ
ツナ ヒク エンヤラヤ。

フハリ

圖一

大正六年十一月廿一日印
大正六年十一月廿四日發
大正六年十一月廿四日翻刻
大正七年一月三十日發行

尋常小學國語讀本卷一

定價金七錢

重文旧開智學校資料

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

平成

受入	元 二 月 六 日 寄贈
受入	杉本 芳雄 氏
受入	桐 子 義 司
受入	重文旧開智學校

大正六年十一月廿八日

文部省檢査濟

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百。八番地²²

日本書籍株式會社

代表者

林 平次郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百。八番地

日本書籍株式會社工場

發行所

一、日本書籍株式會社

一	ウントウクワイ	二
二	オキヤクアソビ	四
三	キクノバナ	六
四	ウシワカマル	十一
五	カンガヘモノ	十三
六	犬ノヨクバリ	十四
七	コフヤケ	十六
八	月	十八
九	クリヒロヒ	二十
十	木ノハ	二十二
十一	ミヨチヤン	二十四
十二	ネズミノチエ	二十六
十三	オ正月	三十

十四	モチノマト	三十三
十五	ユキ	三十七
十六	ユキダルマ	三十六
十七	バサカヂヂイ	四十一
十八	カゲエ	五十四
十九	ナゾ	五十七
二十	オクスリ	五十九
二十一	目ト耳トロ	六十二
二十二	オヤキト子牛	六十四
二十三	コレカラ	六十七
二十四	ヒカウキ	六十九
二十五	大江山	七十一

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ウ	エ	ヲ
ン				

ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
バ	ビ	ブ	ベ	ボ
パ	ピ	プ	ペ	ポ

軍
時
汽車

ぬきます。學校の行きかへりに道草をくつたり、石をなげたり、生物をこころしたりするやうな子どもは、大ていゝるくなものになりません。

二十一 汽車のたび

昨日おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るにいさんの所へ出かけました。

河

てつけうへがかつた時、河を見たら、たいそう水が出て居ました。

「此のよいお天氣に、どうしたのでせう。」

とたづねましたら、

「河上の方で雪がとけはじめたのだらう。」

といふことでした。

と名のりました。すけつねも人に知
られたさむらひ
心えた。

刀
と、まくらもとの刀を取つておき上
らうとしました。二人はすかさず
ち取つて、十郎は二十二、五郎は二十
父がうたれてから十八年目にめで
たくのぞみをとげました。

をはり

大正六年十一月五日印
大正六年十二月八日發
大正七年十月一日翻刻印刷行
大正八年三月三十日翻刻發行

著作権所有

著者兼
發行者

文部省

東京市小石川區久堅町百。八番地 11

日本書籍株式會社

代表者

大倉保五郎

東京市小石川區久堅町百。八番地

印刷所

日本書籍株式會社工場

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

發賣所

日三 月十 年七 正大
濟查檢省部文

國語讀本卷四

價金九錢
大正六年三月三十日發行

がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることである。

昭和45年5月25日購入
 受入先 長野市若松町
 山崎書店
 重文旧開智学校
 重文旧開智学校資料
 をはり

國八

大正十年四月九日印
 大正十年四月十四日發行
 大正十年四月十六日翻刻
 大正十年四月三十日翻刻發行

小學國語讀本卷八

大正十年度金貳拾貳錢
臨時定價

著作権所有

著者 兼 發行者

文 部 省

日五廿月四年十正大
 濟査檢省部文

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町四〇番地 Ⅱ
 日本書籍株式會社

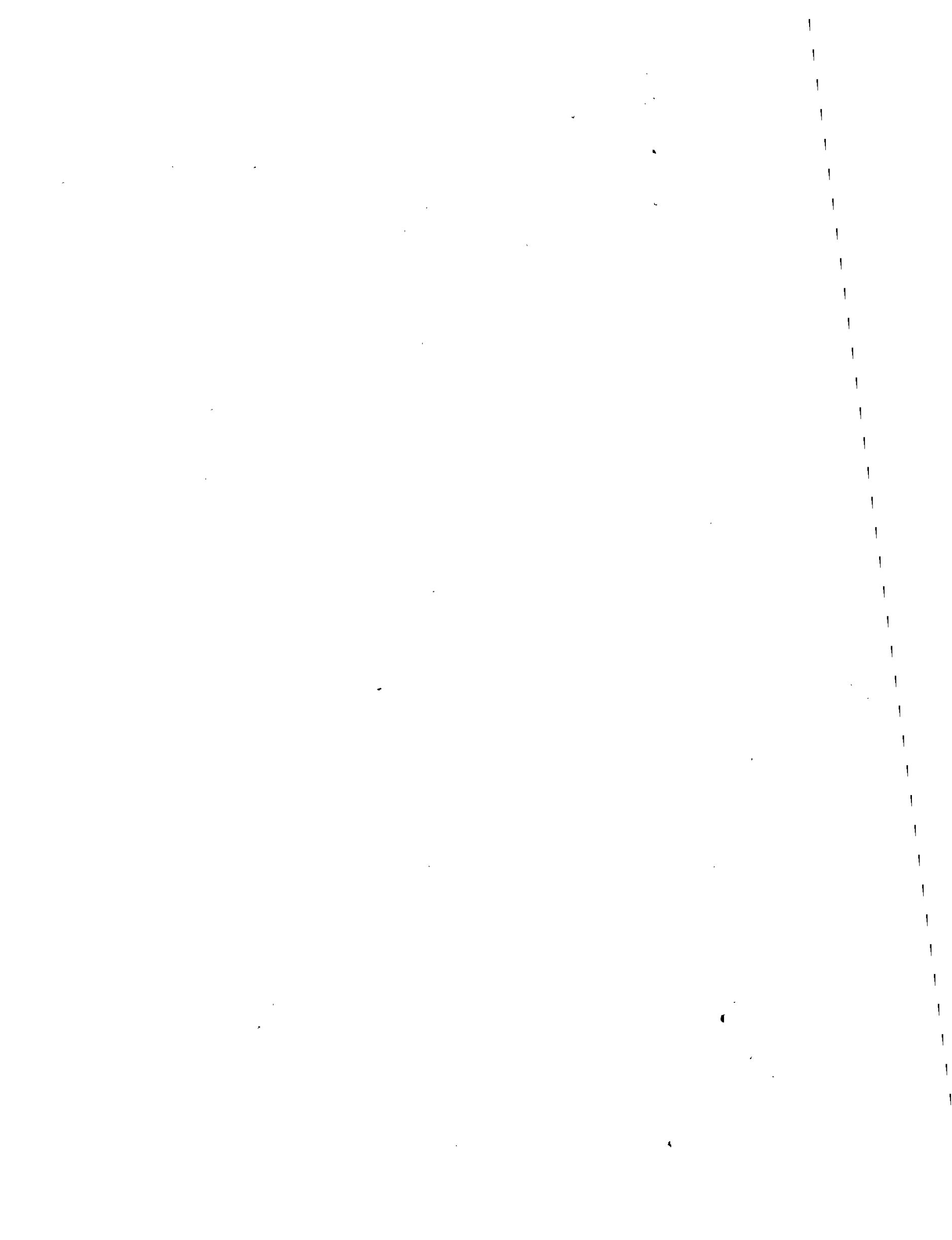
代表者 大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町四〇番地
 日本書籍株式會社工場

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
 株式會社 國定教科書共同販賣所



ドウジ ノ テシタ ラ ノ コラズ
タイヂシテ シマヒマシタ。

三合圖書資料
ヲハリ

國二

大正六年十一月廿一日印
大正六年十一月廿四日發行
大正六年十一月廿五日翻刻
大正七年五月十三日翻刻發行

小學常國語讀本卷二

定價金八錢

著作權所有

發行者兼

文 部 省

大正六年十一月廿八日

文部省檢査日

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地。

日本書籍株式會社

代表者

大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

日本書籍株式會社工場

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十二番地

株式會社國定教科書共同販賣所

モクロク

巻3

一	イマハ	一	十四	うしろしま太郎	三十三
二	イマオキ	二	十五	四方	四十六
三	ヒヨコ	五	十六	私ノ村	四十八
四	うちの子ねこ	十	十七	一口ばなし	五十二
五	お花	十二	十八	をののたうふう	五十四
六	ゆびのな	十四	十九	せみ	五十七
七	かんがもの	十七	二十	さき舟	六十
八	わらびとり	二十	二十一	水デジヤ	六十五
		二十五	二十二	虫ぼし	七十
		二十八	二十三	カウモリ	七十三
		三十一	二十四	十五や	七十七
		三十五	二十五	おじの山	八十一
		三十七	二十六	はごろも	八十二

れいり

イマハ イマハ
 イマハ サクラ ヤナ
 タネ ノ 花ザカリ デス。
 テフテフ、ハ 花カラ 花
 ヒフヒフト アヒ、ハチ
 セツセト ニツヲア
 キマス。
 ニハ スミシ ヤ



ろもの色は日の光にかがやき
 ました。れふしが見とれてゐますと
 天人はまひながら松原の上をだ
 んだん高く上つて、がしの山よりも
 高い太空中のかすみの中へはいつて
 行きました。

をはり

圖三

大正六年十二月五日印
 大正六年十二月八日發行
 大正七年九月廿八日翻刻
 大正七年十月十二日翻刻發行

著作権所有

著者兼
発行者

小書
 學語
 國語讀本卷三
 定價金八錢
 臨時定價金拾四錢

文部省

日三
 月十
 年七
 正大
 濟查
 檢省
 部文

翻刻發行
 兼印刷者

東京市小石川區久堅町百。八番地 10
 日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所
 東京市小石川區久堅町百。八番地
 日本書籍株式會社工場

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十二番地
 株式會社
 國定教科書共同販賣所

★

もくろい

一	お祭	一
二	柿	四
三	十月三十一日	八
四	夢まき	九
五	白ウサギ	十二
六	をぢさんのうち	二十一
七	私どもの町	二十六
八	山びこ	三十
九	フクロフ	三十四
十	目と風	三十八
十一	すまき	四十
十二	かるた取	四十六

十三	夏祭
十四	お話
十五	しひ
十六	大工
十七	扇
十八	山
十九	ナ
二十	一
二十一	二

四

森

一 お祭
うぢがみ さま の 森
いこの おと が しまれ
です。 大きな 字 を 書
すみきつた 空 に 立つた
おひるすぎ に、をばさん
おとよ ちゃんと 太郎
ので、三人で お宮へ、さんの め

ひつちり



黒く、いさを

宮

お祭

七

雪

かと思はないことはありません。

十九 ナツ

私ども二人ハ色モナリモヨク
ニテ居マス。雪ノヤウニ白ウゴザ
イマスガ雪ノヤウニツメタクハ
ナク又日ニテラサレテモトケマセン。
シカシユヤ水ニハスダトケテシ
マヒマス。

四

四

皆

一人ハタイソウ皆サンニスカレマス
ガ一人ハアマリスカレマセン。シカシ
二人トモ大セツナモノデ、ドナタノ
ウチニモナカマノモノガ大テイ行
ツテ居マス。

私どもハ何ト何デセウ。

二十 一本杉

杉

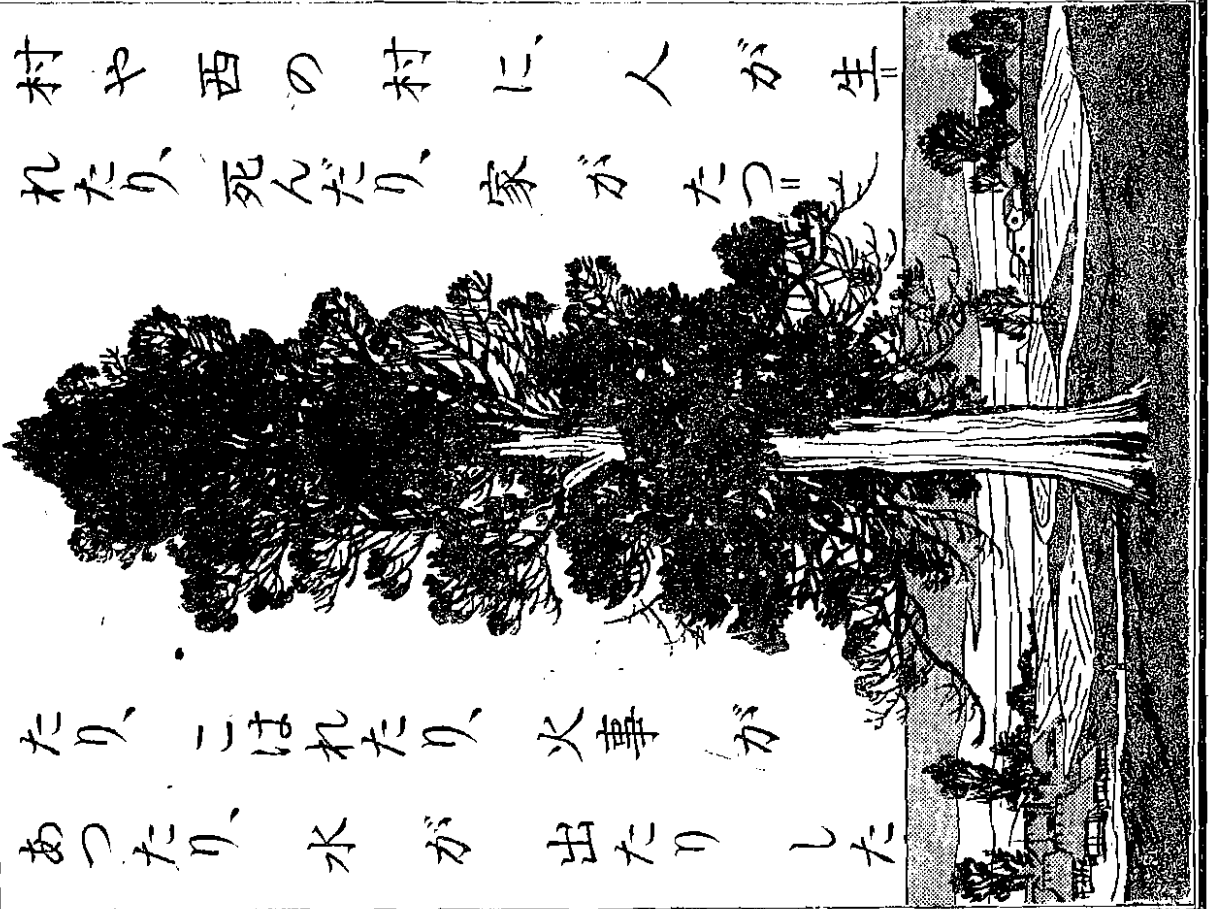
私は道ばたの一本杉です。もう二

百年 あまり も こゝ に 立つて 居ます。
 東 の 村 では ぞれ、もう 日 が くれる
 ぞ。一本杉 の うしろ へ お日様 が お
 はいり に なつた。といひ 西 の 村
 では ああ、よい ばんだ。一本杉 の ふ
 ところ から お月様 が お上り に なつ
 た。など と 申します。
 私 は 長生 を して 居ます ぞ、東 の

死

火 事

村 や 西 の 村 に、人 が 生
 れたり、死んだり、家 が たつ
 たり、こはれたり、火事 が
 あつたり、水 が 出たり した



知村

ことをみんな見て知つて居ます。
私は東の村の今の村長さん
のおぢいさんやおばあさんを其の
わかい時から知つて居ました。まことに
よくはたらく人たちでした。せい
の高い私の目にも、まだお日様
が見えない中から、くはやかまを
持つてたんぼへ行きました。又私の

作稻

かたの上で、お星様が光りはじめる
ころになつて、小さなわらぶきのうち
へかへつて行きました。此の人たちの
田や畠の作り方はていねいでした
から、稲も麦もよそのよりは
よく出来ました。それでだんだんうち
がよくなりました。

今の村長さんのおとうさんもお

金

となしい 人ぞ 小さい 時から よく は
たらきました。西 の 村 一番 の 金持
の むすめ さんが 此の 人 の 所 へ
およめ に 来ました が 其の 時 は な
かなか にぎやかな こと でした。
今 の 村長 さん も 子どもの 時 から
すなほ で なぎけぶかい 人 でした。あの
うちは 此の 上 よくなる ばかり でした。

間

此の 間 きびしい おきう式 が 私 の
前 を 通りました。それは 西 の 村 で
二番目 の 金持 だ と いはれた うちに
生れた 人 の でした。此の 人 は 小き
い 時 から いたづらもの で 大きくな
つても うちの 仕事 も せず、ぬはつて
ばかり 居ました。それで どうとう 家 も
土ざう も 田 も 畠 も 人 の 物 に

間

なつて しまひました。それ から どりへ
行つて 居た が 村 にも ひさしく 居ま
せんでした。
かへつて 來た 時 には、ひどい みなり を
して 居ました。私 の 下 で、長い 間
しょんぼりとして 居まして、日 が くれ
て から 村 へ はいりました。其の 後
間 も なく 死んだ の です。さむい 日

國 四

外 送

の こと で、あまり 氣のどく でした が
ら、私 が 風 の 音を こうつと させ
て やりましたら、送つて 行く 人が 此の
人 も 一本杉 の 外 に ないて くれる も
の が なくなつた。と いひました。
私 は 長い 間 に、子ども を たくさん
見ました ので、どう いう 子 は どう
いふ 人 になると、いふ こと を 見